

## 「ご挨拶」

日本の北の地、北海道の洞爺湖で各国の首脳が集いサミット会議が開催された。このサミットの参加国の首脳への贈答品の一つに江戸の切子を代表する老舗の「切子ガラス」が選ばれた。日本を代表する工芸品の一つに選ばれたことをガラスを愛するもの一人として素直に祝福したい。

国際会議で異なる利益構造を持つ国々を、一つの目的、目標に纏めることは容易なことではないことは誰にでも理解できる。しかし、今や我々は「浸水中の船/リーキーボート (Leaky Boat)」に乗り合わせているのである。宇宙船、地球号はあちら、こちらで軋んで悲鳴をあげ水濡れを始めている船に揺られる。まずは水を汲み出し、そして破れ箇所を修復することが何より優先されなければならない。北極の氷が溶け出し、この地に眠る油の利権を巡る鏑競り合いが始まった。不同意、新たな不和、目くるめき更なる負の循環へのプロローグそして地球船の沈没へのエピローグか。「神のみぞ知る。」では済まされない。

次の開催国はイタリアである。かつて「人口爆発・食糧危機」に警鐘を鳴らした「ローマ宣言」の地での変なる前進を心より期待したい。

アジアの地でもう一つ国際的な集いがあった。四川省を中心とする大地震の災害など、多くの苦難を乗り越えて中国で第29回目のオリンピックが開催された。「鳥の巢」に204に上る国と地域から人々が集ったアスリートの祭典である。前回のギリシャでの記念的な開催に続く中国での開催である。戦いを止めオリンポスの神々の前に集い平和の祭典を開催した古代ギリシャの人々の卓抜した精神性と合理性は生きているだろうか。平和、友好、進歩は実現に近づいたか。「綺麗な街並み、「親切な」中国の人々、「アスリートの清々しさ」これらはロンドンに引き継がれる。「宴の後」に残されたのは何か。

VINは3号の発刊を終えお届けする季節となった。セレブはオリンピック開催国に因んだギリシャと中国の方に登場願った。アテネと北京のお二人の素敵なインタビューをお届けした。環境のテーマは「環境先進国」ドイツをお手本とする内容となった。

「環境首都」のフライブルグ市のリサイクルの仕組みであるDSD（デュアルシステム・ドイツ）取材のご協力にお礼を申し上げる。また「世界の話」にご協力頂いた数々の皆様にも改めて御礼を申し上げます。日本ガラス工芸学会会長の井上暁子先生からは切子ガラスの系譜についてのアドバイス、尚古集成館副館長の松尾千歳氏から薩摩切子についてのお話、江戸切子全般に関し東京カットガラス工業協同組合代表理事の小林淑郎氏にそれぞれお世話になった。また、江戸文化の象徴の一つ浮世絵「ばくれん」の掲載は国際浮世絵学会常任理事の中右英氏のご好意によるもので思文閣美術館の仲介を経て「中右コレクション」の中の喜多川歌麿の浮世絵の逸品の一つをお届けできた。古墳の副葬品のガラス玉の情報は七尾市文化財課北村氏と「能登島ガラス美術館」今井さんのお世話による。

また、一度は途絶えた薩摩切子の足跡辿りは大変だったが、1冊の書物でその中の一つの謎に迫れたことは今回の成果かもしれない。美術工芸史家の池田まゆみ先生のご協力で

「L' EXPOSITION UNIVERSELLE DE 1867 ILLUSTRÉE PUBLICATION INTERNATIONALE LE AUTORISÉE PAR LA COMMISSION IMPERIALE REDACTEUR EN CHEF Mr. Fr. DUCUING Premier volume, p. 331」の書籍により1867年パリ万博への「薩摩クリスタル」の展示が明確化できたことである。薩摩切子そのものであったかは定かでないが、夢は膨らむ。

VINの表紙に関するお尋ねが時々あるので、紙面を割いて補足させていただく。

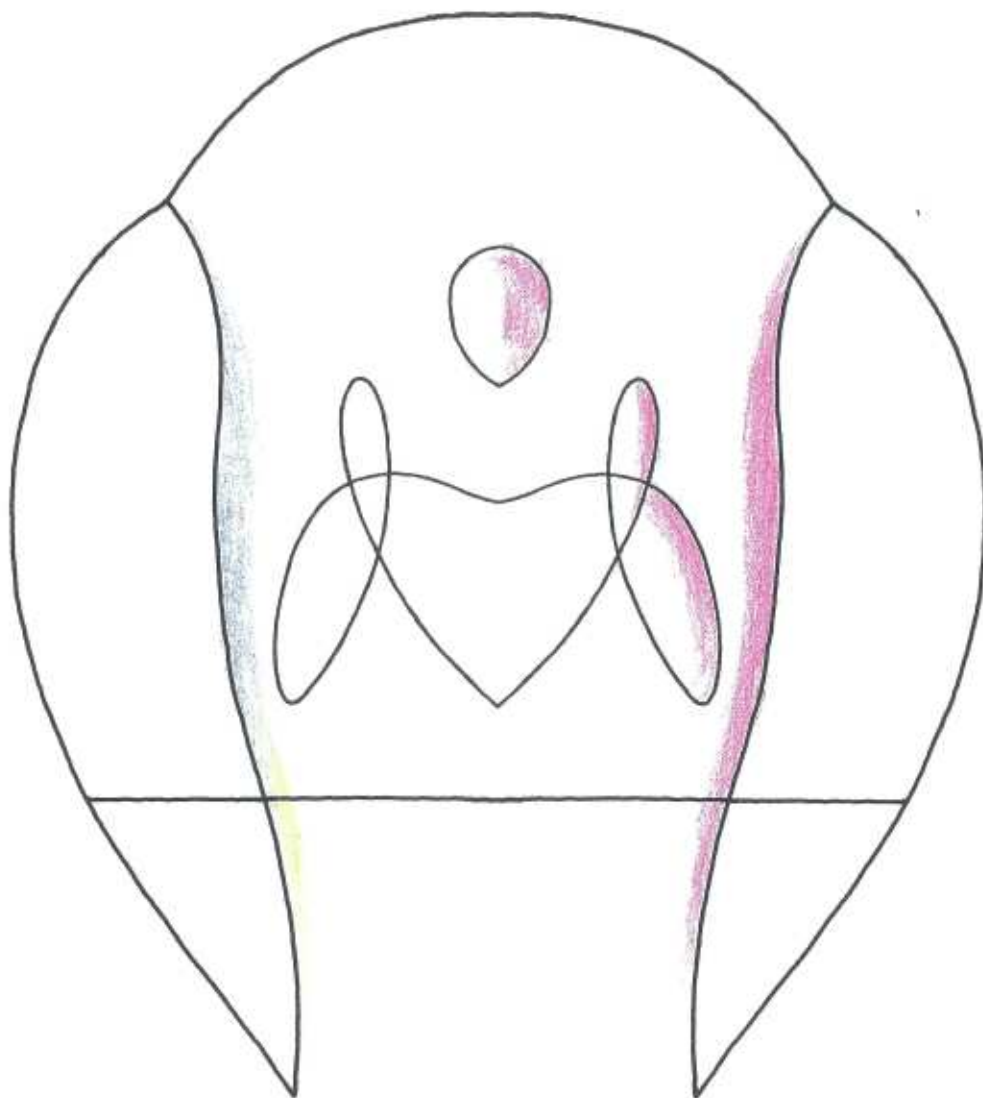
「VIN」はVINTAGE（年代もの高級品・ぶどう酒の意）、また日本語の「びん」の発音をなぞった言葉をタイトルとした。VINの表紙のデザインは三面鏡と女性の姿で、日本の著名なデザイナーによるものである。

今回もフレグランスの精神性を謳う散文をヴィーナスに捧げた。

興亜硝子株式会社

代表取締役社長 出井龍彦

## 何度も生き還る地球の恵み、ガラス。



「人は誰でも、鏡に正面の顔を見ていますが、他人には顔面を見られていないことが多いものです。三面鏡はいちばん身近な『他者の目』として、女性の身だしなみを監視してまわりますが、その存在は消え去らなくなっていきます。三面鏡の復活。それは新しい時代にふさわしい機能を備えた鏡でなくて、初めて夢物語にはなかなかならないうさぎ」。

フレグランスは「抽象」で「普通」

「抽象」で「普通」だから

「特殊」が宿る

「ネ（鼻）」は香りの世界の

マジシャン として

数々の幸せの「特殊普通」を生み出してきた

「羊歯」、「夜間飛行」、「シブコ」、「No5」、

「アルページュ」、「ナルシスノワール」、

「カボチャール」、「レールデュタン」、

「ボワゾン」、「ランテルダイ」、

「禅」、「ミツコ」、

「トレゾア」、「ユースデュー」、

「ジョイ」、「バリ」、「タブー」、

全て「香水」という名のイマジネーション

それは「人生」への「賛歌」、

「香りの普通」は「新しい普通」を生み出す

それは人生を映し出す「香りの連鎖」

数々の「幸せ」を紡いできた「香水」

古人曰く

「人を幸せにすることは

香水を振り掛けるようなものだ

自分にも数滴かかる」と



## 江戸っ子と侍 文化が彫んだ『はなと華』 江戸と薩摩ふたつの切子物語



今日風に「ろくでなし」とでも言うべきか、「ばくれん」のタイトルで浮世絵師の歌麿が描いた「美人」は、蟹を片手に当時流行の特なグラスで酒を飲む、いなせな「御側」。江戸を中心とする町人文化がまさに爛熟期を迎え、高価であったが、グラス製品が庶民の手に届き始めていた。1700年代後半のことである。我が国は勾玉、姉妹玉などのガラス製造は2000年前の弥生時代に遡るが、その後、1600年代まで長い空白期間があり、1800年に入り、再び花開く。それが「ばくれん」に見る江戸時代でのガラス工芸の隆盛の一場面である。この頃、大坂で修行を積んだ江戸のピードロ間屋、加賀屋久兵衛とその一門の人々が「切子細工」に取り組み成功する。

1834年のことである。ほとんどが無色透明な鉛ガラスであった。カット模様は、水に懸濁した金剛砂を金属棒につけて手動で削る独自の研削製法で行われていた。1853年、ペリー提督が江戸幕府との交渉で来航時に加賀屋の切子をみて驚愕し、注文し、米国へ持ち帰った。この時切子が海を渡った。

そして、ここにもう一つの切子の系譜がある。同じ江戸時代の末期に、薩摩藩で咲いた「華」、薩摩切子である。

南国で花開いたこの新しい工芸ガラスのジャンルは、色染せを特徴とする。藩の殖産興業を大きく推進した2代藩主・島津斉彬の強い指導力のもと、全国から人材を集めたが奇しくも、その中の一人が江戸・加賀屋のガラス職人、四本亀次郎であった。

こうして江戸から薩摩へ切子技術が伝播した。薩摩切子の特徴でもある厚い着色ガラスを被せた上からカットし、ぼかし加工を施す技術は質実剛健の薩摩の侍ならではの技法と言えるよう。



左上：浮世絵「歌麿の美人（ばくれん）」（喜多川歌麿/中古コレクション）  
左下：江戸時代の切子ガラス、個人蔵  
右上：薩摩切子「緑色切子鉢・紅色切子碗」、向古美術館蔵  
コラム：七尾市選升1号機出土「ガラス」

1863年、薩英戦争、引き続き西南戦争で工場群「集成館」が壊滅的な打撃を受け、この技術が途絶えてしまった。斉彬が將軍家定に勧めた篤姫の興入れ品の酒器と幻の数百の「薩摩切子」が残された。

明治に入り日本政府は「品川硝子製造所」を設立し、1881年、英国人技術者、ホープマンを招聘した。以降、回転グラインダーでの新しいカット技術が取り入れられた。今日、伝統的な模様十数種が伝わっており、この組み合わせや新しい模様などと共に用いられている。江戸の切子は江戸庶民の「粋」であり「逞しさ」でもあった。

幕末の動乱期、明治維新、関東大震災、第2次世界大戦を語り抜け、今日では東京都指定の伝統工芸品に指定され、170年の歴史を受継ぐ。一方、薩摩の切子は120年の長い眠りから覚める。



島津家と関係者の努力により再現され、1985年復活し、現在では鹿児島県の伝統工芸品指定事業とされている。

日本古来の伝統美の一つに、小さく精巧な物への憧れがある。「枕草子」「なにものにも、ちひさきものはみなうつくし」の世界だ。手の平に入るほどの小さな切子ガラス器の表面の多くの緻密な模様はこの系譜を引くものであろう。2008年7月、日本最北の地、北海道で開催された洞爺湖サミットで江戸切子が有田焼の陶器などと共に首飾への贈答品に選ばれている。日本のガラス文化を代表する伝統工芸・切子ガラスが今日再び、海を渡った。



### コラム 「能登は古代ロマンのまほろば」



能登の七尾市選升1号機出土の1号機は6世紀初頭、前方後円墳の華やかな墳の遺物による。能登半島と七尾湾の美しい景観に抱かれこの地を語るように眠っているのは藤が、木柵の中の御厨子から刀子（とうす）、鉄線（やじり）と共に「ガラス玉」が出土している。この地を支えた「能登氏」は「古事記」によれば高天原の皇子

「大人命命（おおひりさのみこと）」を祖とする。国府が置かれ、日本海文化の拠点として東夷（九島）や国内文化圏との交流、高句麗、渤海など大陸との交流で大きな役割を担ってきた。隣接する新野の地は崇仁天皇の皇子「新野別王（いづつくわけのみかみ）」の系譜を汲むとされる。新野は（はく）の地。共に古代史の多くの謎を解いて長々のロマンの夢をくすぐり続ける。「切子細工」の加賀屋久兵衛の一族が奇しくもこの地盤の出身であった事はまた歴史的な偶然であろうか。

## 三面鏡ひと模様

「中国の抱える問題は、私たちの課題でもあります。」ギリシャ・アテネの女性（42歳）  
オリンピックは4年ごと。今年は8月北京で開催された。その4年前はアテネ。今回は両都市の女性経営者を訪ねてみた。

アテネの女性（42歳）

アテネ中心地で眼鏡店を二軒経営している。主人は整形外科医。だが自分はどこも整形していないと明るく笑う。古代ギリシャ人の面影を残す金髪女性。子供は双子の男。海外に仕事の関係で年に二、三回行く。化粧品はその際に免税売店で買い、新製品が出ればすぐに買うのでたくさん持っている。香水も数えきれないほどある。家の中は広い。インテリアもすばらしい。インテリアコンセプトを好きなガラスとし、家具類はすべて自分で選んでデザインした。

当然、化粧品容器もガラス製が好き。今の希望は、仕事が忙しいがなるべく子供と過ごすことだといながら、15種類の薬草が入って微妙な味わいのお茶を入れてくれる。美味しい。今最も行ってみたい国は日本と中国。中国はアテネオリンピックの次が北京という理由と、世界の大国になる前に行ってみたいのだ。

友人が北京でオリンピック関連の仕事をしていて、環境の問題が多いことを聞いている。

だからこそ、その実態を見て、同時に日本にも行きたいと思っている。環境問題を克服した日本と、問題を残している中国を比較し、そこからギリシャの未来を考えてみたいのだ。

そう語る瞳の向こうに、ガラスカップがケースの中でキラキラ輝いている。



北京の女性（28歳）

人気の高い流行ファッションビルの四階で、ウルトラマンキャラクターグッズの店を経営している。

自宅は店から近い1階のアパート2DK。ドアを開けると、すぐに大きな浴衣収納があり、洗面所にも鏡があるが、化粧するのはテレビの前におかれた応接セットのテーブル上。

そこに卓上鏡とススキア化粧品が並んでいる。メイクアップ類はメーカーが販促物で提供してくれたバッグに入れてあり、テレビ横の棚においてある。

化粧品はデパートかインターネット通販で購入する。

化粧品を選ぶポイントは、中味確認である。

サンプルで使用してみて、その結果で選定するが、容器はガラス製がよいと明確に主張する。

今後の目標は、日本にあるという。子供服を含めた、キャラクター品のウルトラマン総合館を展開すること。

その理由は、これからの中国は、さらに消費意欲が高まって、結果として、あらゆる商品が行き渡っていくだろう。

そうなる一般的なアイテムよりは、高度で専門性のあるものが求められていくはずだし、現状はそのような客層が増えてきていると認識している。だからこそ、店の専門性を追求した総合ショップを展開したいのだ。

そう語る瞳の向こうに、美しく微笑む写真が飾られている。





# 「グリーンマークシステム ドイツが環境先進国のトップを走る理由。」

## 環境先進国ドイツのゴミ処理実態 (1)

日本では、ゴミ収集日に各家庭からゴミ袋が道路に出され、そのゴミ袋を網ネットで覆っているところが多い。しかし、その努力を嘲笑うがごとく、カラスがネットの上からくちばしをいれ、毎朝、カラスの宴会が行われている。一方、ドイツではカラスはどこにいるのだろうか、探すのに苦労する。カラスとゴミは関係ない。それはゴミ処理システムが根本的に異なっているからである。今回は環境先進国ドイツの実態を、南部の四都市から今号と次号に分けて紹介する。

### 環境首都フライブルグ

フライブルグは人口22万人。黒い森(シュヴァルツヴァルト)に隣接し、交通システム、エネルギー政策、ゴミ処理、自然環境保護など、世界をリードする環境先進国ドイツの中でも、先端を疾走する都市である。

市のゴミ処理方針は「なるべくゴミを減らすことと、環境にやさしい処理」であり「ゴミ処理費用の完全住民負担」である。

「ゴミを減らす」ためには「残余ゴミ Restmüll」という「分別、リサイクルできるものを除いた残りのゴミ」の理解がポイントになる。自宅には

資源ゴミ・生ゴミ・残余ゴミの三つのプラスチック製BOX



と、包装資材用の袋(DSD・次項で説明)が置かれているが、市民が負担するゴミ収集費用は、世帯人数の基本料金に、残余ゴミ用BOXのみの利用料が加算されるシステムである。また、そのBOX料金は、大きさで異なるので、市民はなるべく残余ゴミを減らし、小型BOX化することで、費用負担減を図ることになる。

「環境にやさしい処理」とは、資源ごみのリサイクルは当然として、ビン専用カラートラック(写真)で収集指定場所からリサイクルされ、生ゴミは専用施設でコンポスト(堆肥)化、包装資材はDSDで収集されるシステムである。

今やフライブルグは、ドイツの環境首都と称され、自然と環境の保全に貢献している都市として、世界中から多くの環境関係者が視察に訪れる街となっている。



### アウグスブルグのDSD社(デュアルシステム・ドイツ)

1990年に「包装廃棄物の回避に関する政令」が法制化され、生産者が製造だけでなく、収集・分別・リサイクルといった、製造後にも責任をもつ「生産者責任」が明確化されて、それを推進するために生産者、小売業者などが出資して設立されたのがDSD社で、本社はケルン、支社がハシブルグと、ここ二千年の歴史をもつ街アウグスブルグにある。システム概要は、生産者はDSD社に、例えばガラス1トンにつきいくらかというライセンス料を支払い、「グリーンマーク」を商品の包装資材に印刷し販売する。この「グリーンマーク」がついた商品は、DSD社の指定する委託業者が収集・分別・リサイクルし、その費用は、DSD社が生産者から受け取っているライセンス料から支払う。生産者はグリーンマーク代として、DSD社に支払った金額を商品価格に上乗せしているため、最終的には消費者がリサイクル費用を負担するシステムである。



定着し、ドイツを見習って世界ですでに21カ国が導入済みである。ドイツ国民の環境に対する意識の高さを認識させるのが、DSDシステムであろう。

次号では、ミュンヘンとカールスルーエについて紹介する。



本社 〒132-0035 東京都江戸川区平井1丁目25番27号  
営業本部(直通電話)  
大船工場 〒251-0013 神奈川県藤沢市小塚23番  
市川工場 〒272-0126 千葉県市川市千鳥町2番  
大阪営業所 〒541-0041 大阪市中央区北浜3丁目1番14号  
タカラ淀国崎ビル3階  
上海高麗玻璃有限公司 〒201801 中国上海市嘉定区马陆镇安翔路88号  
TEL.03(3684)1211(FX)  
TEL.03(3684)2705(FX)  
TEL.0466(23)5421(FX)  
TEL.047(337)4101(FX)  
TEL.06(8229)1619(FX)  
TEL.021(5815)8855(FX)

今回「VIN」発刊に当たり多くの方々にご協力を頂きました。  
取材協力：梶島津興業 員古集成啓  
東京カットグラス工業協同組合  
江戸切子の店「華硝」(羽前瀬サミット情報)  
日本ガラス工芸学会  
中右映氏 / 恵文閣美術館  
七尾市教育委員会 / 能登島ガラス美術館  
参考文献「ユグヤ 5000年の歳入」(実業之日本社)